

2016 年3月21日

札チャレラジオ通信 第11回

加納：三角山放送局をお聞きのみなさん、こんにちわ。毎週月曜日午後 3 時からお送りしております札チャレラジオ通信の時間です。私はパーソナリティーをしておりますNPO 法人札幌チャレンジドの加納です。よろしくおねがいします。この札チャレラジオ通信は自立を目指す障がいのある人が IT でマザル・ハタラク・拓き合う社会をつくりたい、そんな思いで活動しています札幌チャレンジドが、ここ三角山放送局からお届けしております。今日のサブは総務グループリーダーの岡野さんです。よろしくおねがいします。

岡野：よろしくおねがいします。

加納：岡野さん今日は祝日ということで、ちょっといつもと生活のリズムが違います。

岡野：違います。どうもまだ体が休みの感覚です。

加納：ちゃんと舌が回るか、さっき二人で心配してたんですけども。そんなことでこの番組は毎週札幌チャレンジドの活動にゆかりのある方に来ていただいてですね。そういった方のお言葉を通して札幌チャレンジドの活動を幅広いリスナーの皆さんに聞いていただきたいと思ってやっております。そして今日のゲストは、老若男女問わず様々な方に関わっていただいているんですけど。今日はその中で一番若い世代の人ですね。

岡野：多分一年を通して一番若いと思います。

加納：最若手の方がゲストで来ておられまして。今日のゲストは北星学園大学ソーシャルビジネスサークルプラスの元代表の高橋さんと、この 3 月から新しい代表になられました中仙道さんのお二人です。こんにちわ。

高橋・中仙道：こんにちわ。

加納：ありがとうございます。学生さんですから春休みということで、春休みは春休みで実はもっといろいろ忙しくてやらなきゃいけないこともあると思うのですが、番組に来ていただきましてありがとうございます。それではまず早速、お二人に簡単に自己紹介をしていただきたいと思います。まずは元代表の高橋さんお願いします。

高橋：はい。北星学園大学経済学部経済法学科 3 年の高橋希と申します。プラスはですね今月の 3 月で代表を一年間を終えまして、4 代目代表としての仕事を終えて次に引き継いだばかりです。本日はよろしくお願いします。

加納・岡野：よろしくお願いします。

加納：では、中仙道さん。

中仙道：はい。北星学園大学経済学部経済法学科 2 年ソーシャルビジネスサークルプラスの代表になりました中仙道彩と申します。よろしくお願いします。

加納・岡野：よろしくお願いします。

加納：二人はこういうラジオのマイクの前で話をするなんて経験は今までお有りですか？

高橋：ぼくは今まで学校のラジオとかで一度二度ほど経験させていただいたことがあります。

加納：学内でもこういうラジオがあるんですか？

高橋：そうですね。学科が違うんですけど経営情報学科という学科でラジオをやっていますね。それで北星の生徒が呼ばれてお話をするという機会をいただいたりしています。

加納：大学の中でしか聴けない？

高橋：外でも聴けます。同じように。

加納：コミュニティーFMの電波が飛んでいる？

高橋：はい。

加納：へえ、知らなかったです。今度聴いてみます。

岡野：学内でやっているというのはなかなか面白いですね。

加納：中仙道さんはどうですか？こうゆうスタジオは。

中仙道：私は初めてで、スタジオに入るのも初めてなのですごく緊張してるんですけど、アハハ。今日は頑張りたいのでよろしくお願い致します。

加納：お願いします。それでは自己紹介いただきましたけれども、ソーシャルビジネスサークルプラスということでお二人はサークル活動されているんですが、ラジオお聴きの方はですね、ソーシャルビジネスってそもそもなんだろう？とかですね。それをサークル活動でやっているって、どんなことをやっているんだろうっていうふうに思われているので、まずは皆さんのサークル活動についての概要を教えてくださいませんか？

中仙道：はい。私たちはメンバー1人1人が社会的課題と向き合い、社会起業精神を形成し、社会に貢献するということを目的に活動しているんですけど、ウフフ。

加納：カッコいい。

中仙道：すいません。すごいカッコいいことを言っちゃったんですけど、ウフフ。全然そんなことはなくて、ウフフ。

加納：岡野さん、社会的課題とか考えたことありました？

岡野：こんなことは言えません。

加納：正直、私も。なるほど。もう少し何か補足はありますか？

高橋：そうですね。理念とかについては今、中仙道が言ったとおりなんですけど、具体的な活動とかって言うと、毎年、神恵内村という村にボランティアとして行かせていただいています。その村は少子高齢化とか過疎化が大分進んだ村でして、そういった所で村の課題とかも向き合いつつお手伝いさせています。あとはソーシャルビジネスって何だろうという所を皆さんに広める講演会を実施したりしてきています。

加納：お二人はそれぞれに、このサークルにどうして入ろうと思ったとか。サークルとの出会いを聞かせていただけますか？

高橋：僕はですね、大学1年生の時に別のボランティア系のサークルに入ったんですね。そこで当時プラスの4年生の先輩がいて、いろいろ話を伺っているうちに、一度サークル

に見に来なさいと。見に来ない限りわかって貰えないから、とりあえず来てと言われて、会議に参加させていただいたんですね。それで正直言うと、ちょっと何やってるのかよくわからないというのが当時の感想だったんですけど。とりあえず凄く一生懸命何かに取り組んでいるというのは、先輩達の熱から感じたところで。ここでもう少しちょっと一緒に居てみたいなあと思って、右も左もわからずソーシャルビジネスサークルが何かも分らなかったんですけど、入っていろいろ活動やらせてもらいました。

加納：人の出会いだね。中仙道さんはどんなことで入られたんですか？

中仙道：私は、違うサークルに入っていたことは高橋先輩と一緒になんですけど、その時にソーシャルビジネスサークルというのに入っているという話を聞いていて、どうゆう活動をするかということは聞いていたんですけども。ちょっとソーシャルビジネスってのが難しく、全然話が入って来なくてですね。で、先ほど言っていた神恵内村にボランティア活動に行くときに温泉に入れるというのを聞きまして。あ、温泉に入れるなら是非参加したいというふうに思いまして。それがきっかけでした。

加納：あはは。そうだね、そんなにソーシャルビジネスを一緒に考えようって言われてもね。

中仙道：初めて聞く言葉でした。温泉に魅力を感じて入ったのがきっかけでした。

加納：二人は高校の時にはソーシャルビジネスなんて言葉は無いかあ。現代社会とかで。

高橋：そうですね聞いたことなかったですね。

加納：そうですね。そんなお二人ですが、サークルが出来てから5、6年のようなんですけども、札幌チャレンジドとプラスさんとのお付き合いというか、出会いというかですね、今どんなことをやられているかをお聞かせください。

高橋：はい。今年の4月だったと思うんですけども。

加納：去年！

高橋：あ、去年。去年ですね。今年の4月は来月ですね。

加納：未来を予言して。

高橋：去年の4月ですよ。プラスとして何かソーシャルビジネスをやっている団体に関わって、チカラになれるようなことをしたいなあっていうふうなことで、そういう団体に募金を集めようという企画を立てまして。ちょうど4月のお花見シーズンですから中島公園で、たくさん人がいらっしやると思って、そこで募金をやったら、たくさん募金を集めてよりお役に立てるんじゃないかなというふうな企画をして。で、その募金を受け取って頂く、受取先として札幌チャレンジドさんにお声掛けをしたのが、団体としてのつながりの一番最初だったと記憶しております。

加納：そうですね、はい。岡野さん驚きましたよね。

岡野：はい。全然知らないっていうかね、はじめてそういう団体から。それも寄付といっても、街頭で我々のために募金をしていただくというような、そういう内容を聞いて、これは素晴らしいなあって思って、喜んでいました。

高橋：ウフフ

加納：なかなか実際はね、街頭募金がね、やるのが難しかったんですよ。

高橋：そうなんですよ。やっぱり公園とかで、そういう活動するには許可が要するというところで、いろいろ確認してもらった所、結果、許可をいただけず、募金活動はできなかったという所です。

加納：そうですね。で、それが次の形につながっていくわけですね。

高橋：ええ。

岡野：それで、じゃ何かできればうちの活動のボランティアの方に参加をしていただけないかなあということ。それで今度はメールのやりとりだとかね。

加納：で、我々から逆提案をさせて頂いた！

高橋・中仙道：ありがたかったです。

加納：岡野さん、どんな活動にご参加いただくように、お声掛けいただいたんでしょうか？

岡野：はい。私ども、イオンさんが幸せの黄色いレシートキャンペーンというのをやってま

して。そこに登録している団体さんに黄色いレシートの 1%の寄付をいただけるということがあるんですけども。その参加団体が年に一度か二度、レジの所でお声掛けをしてくださいという、イオンさんからの依頼があって。それにちょうど 5 月と 11 月に案内があったんで、たまたま先ほどの 4 月にプラスさんからの要望が、残念ながら寄付が駄目になっちゃったんで。その 5 月に声掛けにどうかなって思って、それでメールでお願いをして、それがきっかけですね。

加納：はい。だからそれこそ募金の呼びかけが、黄色いレシートの呼びかけに、ちょっと変わったというかね。でも何かうまく整合性が取れているというか、流れじゃないかと思うんですけど。実際に黄色いレシートのキャンペーンのお声掛けを手伝っていただいて、どうでしたか？中仙道さん。

中仙道：はい。レシートを実際に入れてくださった方に札チャレってどんな活動しているの？とか、いろいろ聞いていただいて。私が説明するというよりは、隣にいつも岡野さんいてくださって、岡野さんがいつもされて。頑張ってるねって言っていただいて。で、少しでも色んな人にしていただけたということが、とても嬉しかったですね。

加納：なるほどね。高橋さんどうでしたか？そういう体験してみて。

高橋：そうですね。イオンの中で、結構大声で呼びかけるというのが、一番最初はちょっと抵抗があったんですけども。やっぱりやってるうちに楽しくなっている自分がいまして。声掛けて、入れられると嬉しかったですし。やっぱり顔を見てそうゆうふうに協力してくれる人たちがいるっていうのは、面と向かってそうやって、頑張ってるねとか言ってくれるのは、すごい嬉しかったので。やっててツライとかっていうことは一切なくすごく楽しかったです。

加納：そうですね。入れてもらうのはレシートなんだけども、実はお金を入れてもらってるのとイコールで、レシートの金額の 1%の金額のものが 1 年間集計して、例えば 4 万円あったら、4 万円分の商品を札幌チャレンジドが買えるんです。そんなことで協力をしていただきました。それではですね、ここで少し休憩ということで、高橋さんのリクエスト曲を是非かけたいと思います。高橋さん、曲名を紹介してください。

高橋：ええ。曲名は、ピースとハイライト、です。

加納：三角山放送局お聞きのみなさん、札幌チャレンジ通信、後半に入りたいと思います。今日のゲストは北星学園大学のソーシャルビジネスサークルプラスの高橋さんと中仙道さんに来ていただいておりまして、若いお二人がおられるといつもとはちょっと違う雰囲気、とてもウキウキとしながらやっておりますが。岡野さん、今前半のお話で黄色いイオンさんの幸せの黄色いレシートキャンペーンにお手伝いいただいて、去年1年の集計が出たそうなんですけども。

岡野：はい。このまえ案内がありまして、去年1年間で札幌チャレンジドに350万円の黄色いレシートの投函がありました。これもプラスさんのおかげだと思っています。

加納：みんな頑張ってやってくれたおかげです。

岡野：その1%ですから、3万5千円。これの寄付をいただけるということで、4月21日に贈呈式ということでイオンの元町店、ちょうど真ん中ら辺にあるところで。そこで贈呈式を1時から開始されるそうです。

加納：イオンさんの黄色いレシートキャンペーンは、各お店単位でやられているので、札幌チャレンジドは元町店さんに登録をさせていただいています。そうゆうことで今年は何を買おうかと考えなきゃ。過去は、電子レンジとか、掃除機。いろいろ買わせてもらいました。

岡野：そうですね。空気清浄器もありますよ。

加納：備品系ですね。なかなか自分で買うのはね。消耗品とかはどうしても買わなきゃいけないから買うんですけど、備品系はなかなかそう簡単に買えないので、そういうものを買わせてもらっていますが。今年もまた、あるのですよね。レシートを入れてくださいキャンペーン、あの声掛け。

岡野：あると思います。今年のエントリーも提出しましたんで、多分それがイオンさんで認められれば、また今年1年札幌チャレンジドがエントリーして。おそらくお声掛けも2回ほど案内が来るかと思っています。その時また、よろしくお願い致します。

加納：新しいプラスさんの年間の活動計画に是非組み込んでいただければと。よろしいでしょうかと中仙道さん。

中仙道：お願い致します。

加納：ありがとうございます。札幌チャレンジドと声掛けボランティアでつながっていただいているんですが、札幌チャレンジドの活動を部員の皆さん来ていただいて、ご説明なんかもさせて頂いたこともあるのですが、今後、もう少しこんな形で札チャレとつながれたらなぁ、みたいなことがあればですね是非聞かせていただいて、私たちもそういう方向に進んでいきたいなぁと思うんですが、何かありますか？どうでしょう。

中仙道：はい、障がいを持っている方の得意なことを生かした活動のお手伝いを出来たらなぁというふうに思っています。例えば北海道チャレンジドアートプロダクツ。

加納：はい。障がい者アートの団体ですね。

中仙道：そういう活動のお手伝いだったり、あと大通りの所に、元気ショップってありますよね。ああいう感じの障がいを持っている方が作ったものを販売したりとか、そういうふうなのをお手伝いさせていただくようなことを一緒に出来たらなぁというふうに考えています。

加納：たまたま札チャレとつながったことから、障がいのある方と接点ができたということなんで、そういう所でさらに力にもらえれば嬉しいですね。

岡野：嬉しいですね。

加納：高橋さんは代表は交代しましたが、引き続き就活しながらサークル活動を続けられるんでしょう？

高橋：そうですね。一応僕、今は東京の方で就職活動やらせていただいているので、その合間を縫って北海道に帰ってきた際には積極的にお手伝いするつもりで。そのために帰ってきている。

中仙道：よろしくをお願いします。

加納：今サークルのメンバーは何人くらいおられるんですたっけ？幽霊部員もいるかもしれない？

中仙道：今、基本いるのは7人ぐらいです。

加納：そっか、4月になったらまた新入生入ってくるものね。頑張って勧誘してね。

中仙道：頑張りたいと思います。

加納：遠慮なく札幌チャレンジドの見学、また新しい人が入ってきたら、来ていただいたら。

岡野：いつでも。

中仙道：はい、是非よろしくお願い致します。

加納：はい、それではですね、サークル活動として段々代替わりしながら活動を少しずつ進めていると思うんですけども、今後こういうことをやってみたい、今は神恵内村の活動が割と中心になっているんですけども、その辺りのサークル活動としての計画っていうようなことは、いかがでしょうか？

中仙道：はい。先ほどお話しにもありました黄色いレシートキャンペーンも、今年も是非よろしくお願いします。あと神恵内村のお祭りの手伝いだったり。あとは他団体との交流を目的としたイベントとかも、やっていきたいなあというふうに思っています。

加納：なるほど。イベントの告知があるんだったら、このラジオで。今年一年間は続けておりますので。

岡野：こちらの方でも。

加納：2、3分ならこれでも告知できますから。あの神恵内村さんとは何年くらい？もう3年くらいなるのかな？

高橋：僕が1年生の頃に多分、2年目か3年目だと思うので、もう5年とか4年なんですかね。

加納：そうだね。神恵内村の魅力をですね是非ラジオのお聴きの方にですね、これも町おこしのPRの一つですから、是非お二人にそれぞれの口で伝えていただけますか？

高橋：はい。神恵内村はですね、とにかく海が綺麗なんですよ。僕のいとことかが釣りが好きなんですけど、釣りするって言ったら、神恵内まで車を2時間半くらい運転していくくらい海が綺麗で、釣りとかも楽しめてっていう。そういった面で自然がすごい豊かで。あと

は活動させていただいてはじめてわかったことなんですけど、村の方々がすごい良い人。ほんとに良い人。ボランティアで僕らが行ってるのに、僕ら、もてなされて帰ってきたぐらいな感じが。いろいろお魚いただいたり、というふうにすごい親切な方々、本当に良い町なんですよね。

加納：なるほど。力籠ってますね。

岡野：神恵内村って、裏積丹とか言われて、実は私も釣りをやるんで、知ってるんですよ。やっぱり行きますよ。良い所です、綺麗な、環境もいいですし。釣りに関してもすごく良い場所です。

加納：何が釣れるんですか？

岡野：いろいろです。鰈だとかホッケだとか。

加納：はい。じゃ中仙道さんはどうでしょうか？中仙道さんの目から見た神恵内村の良い所。

中仙道：ほんとに海が綺麗なので、海の幸がとても美味しくて。正直私、貝類とか苦手だったんですけども。神恵内のホタテだったり、そういうものが初めて食べれるようになって、とても美味しくって。あと温泉が・・・、ホントに気持ちいいですね。

加納：いいなあ、温泉。道の駅とかはありますか？

高橋：道の駅もあります。はい。

加納：札幌から車でだいたい行かれるんですか？

高橋：そうですね。それで2時間か2時間半くらい。

加納：2時間半くらい。ドライブですね。一泊して、温泉入って、美味しいもの食べて、いいね。

高橋：そうですね。ほんとに良い町なんです。

加納：民宿とかもちゃんとあるんですか？

高橋：ありますね、はい。

加納：そんなところでソーシャルビジネスサークルとして神恵内でさらに今年は、こんなことやりたいとあってありますか？町のPR大使をやるとか。

高橋：そうですね。今年、学校祭ですね、色んな町の食材をこちらで買って、で調理をして学校祭でPRとして出すというようなことをやらせていただいたんですけど、今年もそういった形で神恵内のPRとか、またさらに出来たらいいなあと思ってます。

加納：なるほど、やっぱりきっと地域の人っていうのは高齢化が進んでるので、若い人がどんどん町から出ていっちゃうから逆に若い人が地域に来てくれるっていうのはね、非常にうれしいんですね。岡野さんの地元、富良野でしたか？

岡野：はい、富良野。

加納：富良野はどうですか？富良野はまだまだ、そこまで高齢化が進んでいるわけではないですか？

岡野：いや、年々人は減っていますね。やっぱりどんどん観光、これを増やしていかなきゃいけないというような感じになっています。

加納：本当にやっぱり北海道にいながら、北海道の町知らない所、僕もですけど、もう28年になりますけど、行ったことない所たくさんあるから。是非、学生さんの時間のある時にいろんな町を訪ねて頂ければ、良いかなあと思います。はい、ありがとうございます。もうあと1分数10秒ということで締めめのBGMが鳴っておりますが。岡野さん良いですね、やっぱり若い人たちが。

岡野：良いです。

加納：若い人たちが楽しいそうなんですよね、ホントに。ユーストリームで表情が見えてる方はですね、そういうのが伝わるかと思うんですけども。やっぱり夢があるって良いですね。我々もまだまだ夢を持って頑張らなきゃいけないですね。

岡野：一緒になって我々も笑顔になって。

加納：ホントそうなんですよ。若い人がウチに居てくれたら。ウチにもう平均年齢70歳以

上とか 80 歳ぐらいの会報誌を発送しているボランティアさんなんか、そこに 60 歳の人が入るだけで若手ですからね。それでも、若手が来たって喜んでくれる。だからいつになっても自分より年下の人と接するのは、やっぱり嬉しいものなんだなぁと、もうあと 30 秒。岡野さん、来週はどうゆう予定になっていますか？

岡野：はい。来週は大学のキャリア支援課、インターンシップの関係だとか、大学内の障がいのある方のお話を聞いて。

加納：なるほど。来週も私と岡野さんでやりますので、また月曜午後 3 時、札チャレラジオ通信をお楽しみください。それではお二人、どうもありがとうございました。

岡野・高橋・中仙道：どうもありがとうございました。

加納：さようなら。